

あらゆる地域で自然を愛で
その土地の神を崇拝し
生活の場面でその恵みに
感謝する風習があるだろう

特に地方の村や集落
小さな島では崇められる
神の対象や祭事が特殊で
あるがため、外部の者から
理解され難い「奇祭」と
呼ばれるものもある

魔羅神様と白き祝詞

吉田わざび

おお……
やっと来たか



祭事は神聖とされる山の祠で行われ、祓いに必要な大幣おおぬさに魚や野菜、酒などの神饌しんせんを用意し村の男たちが集められる



俺が生まれ育ったこの村は農業・漁業など自然の恵みによって栄えてきた・・・それは、この土地に住まう産土神うぶすながみ「魔羅神様まらがみさま」の恩恵によるものと言われており年に一度の八月、神をもてなす祭が村の男たちによって行われる



「魔羅神様」にとって男たちの子種はなによりの好物らしくそれを捧げる祭がこの鎮座祭なのだが神は実体がなくそのままでは捧げられない



祭の進行を担う齋主は代々、村の村長が務め祭事を行うにあたり女人は祠への出入りを禁じられ男性のみが出入りを許される



俺は「出雲 幸介」いずも こうすけ普段は村役場の職員だが今年の「依代」として選ばれ初めての事に緊張している



そこで必要になるのが一時的に神の器・捧げ物の受け皿両方を兼ねる「依代よりしろ」であり、その年の村で一番大きい逸物の持ち主が選ばれる



村長兼斎主
ごおうげんいちろう
護王源一郎

出雲、儀式を
始めるにあたって
これを飲んでもらう



ではこれより
「降霊の儀」を行う



一気に
飲み干せ

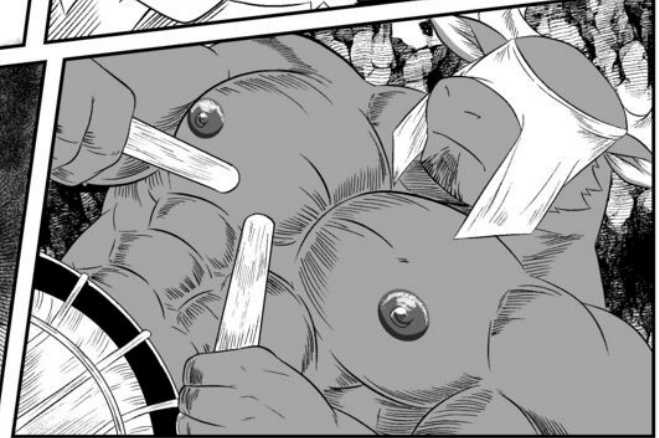


「依代」のために
作られた特別な
御神酒だ



特にちんぽが
ものすごく熱く
脈打っている…

これも
酒の効果なのか？



何だ…身体が
熱くなったきた



な、何を…？

ではこれより
「来格の儀」に移る



準備は
整ったな



ううう…

アキユッ



クワッ

クワッ

うあ！！

クワッ





ひぎっ!?



ギョッ



ハッ

ハッ

ハッ

ん



そ、そんなに
されたら
俺……もう……

このまま
弄り倒してやろう



乳首でも相当
感じるようだな

あぐっ……!
そ、そこはっ!!





より喜んでもらう為
さっきの御神酒を
逸物に塗り込む

逸物が大きく
なったのは「魔羅神様」が
宿られたからだ



ち、ちんぼが熱い…
それに…何で
吊るされて…

この方が儀式を
行いやすいからな



そ、村長!!
飲んだだけでも
凄まじいの…

ちんぼに直接
塗られたりしたら
おかしくなりますっ!!

キッ

キッ





剛ちゃんが
「突守」なのか…!?



えっ?
ご…剛ちゃん?



幸介…
あの時の「約束」
今ここで果たそう



ご、剛ちゃん!!
まさか…そ、そんな

熊野宮 剛…
俺の幼なじみであり
親友にして初恋の人…
叶うはずがないと
内に秘めていた想い…
こんな形で彼と
交わることになるとは







俺と剛ちゃんは生まれ育ったこの村が大好きだった

学生の頃、いつか二人で村を守る祭の主役を担う「依代」と「突守」になろうと約束した



尻で感じるおびただしい熱と凄まじい快樂の中昔の事を思い出した



しかし、あの頃は祭の具体的な内容を知らなかった

祭りはこれからだ皆で「魔羅神様」を盛大にもてなすのだ



しかしこの光景は神へのもてなしというよりも村中の男たちに蹂躪されているように見えるだろう

それでも俺の身体は…いや、俺の中の神様は男たちの盛大なもてなしに喜んでいようだ



あの頃は子供だったからか親や大人たちに聞いても教えてくれないことはなかった…教えられるわけがない

内容を聞いた時はかなり戸惑ったがそれでも俺は退かなかった

「魔羅神様」の「依代」になることで村を守るなら本望だったから



「魔羅神様」にも
お喜び頂けたようだ

これで一年は
大漁に豊作と
村も安泰だ



さあ・・・
これで最後だ



俺の「依代」としての
役目は終わり
村の安泰だけでなく
想い人と身体を
交わう事も叶った・・・



幸介・・・

しかし、これは俺が
望んだ結果だったのかと
混濁する意識の中で
自身へ問いかける・・・
内外共に全身にわたり
神への白き祝詞という
男たちが放った子種に
まみれながら襲い掛かる
疲労感に俺は気を失った